



Title	中国現代小説における武漢弁使用の一考察：池莉を中心として
Author(s)	瀬邊, 啓子
Citation	大阪大学言語文化学. 1997, 6, p. 65-76
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78092
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国現代小説における武漢弁使用の一考察

—池莉を中心として—*

瀬邊 啓子**

中國改革開放以後，“地方主義”的積極性不斷提高。文學作品也開始反映各地獨具特色的文化色彩。這種趨勢推動了絕大多數的地方文化的發展。

其中，“漢”味小説也脫穎而出。這些小説帶有武漢的風情，也具有濃厚的武漢風味。以往，用武漢方言寫的小説不多。池莉和方方獨樹一幟發表了用武漢話（武漢方言）寫的小説。尤其是池莉精巧地利用武漢話描繪出武漢人的日常生活。而且是用武漢話對話與普通話描寫相結合，生動地表現出社會階層的不同風貌。

武漢話並非知識階層的語言，而是普通的市民語言。池莉用武漢話描寫了普通人的生活，她的作品反映的是武漢普通市民的文化。在池莉的作品中，《冷也好熱也好活着就好》與她的其它作品不同。其中，對話部分都使用了武漢話。她之所以採用這種寫法是希望人們能夠通過這些對話真正理解武漢話的內含和用法。

池莉的作品卓有成效地點綴性的用武漢話表現了典型的武漢文化。但是《冷也好熱也好活着就好》發表之後，就不再使用武漢話寫小説了。這是為什麼呢？

首先她以為她的作品已經充分反映出武漢話的特色，適可而止為好。其次，武漢話的文字表現受到限制。因為武漢話不是文章語。第三，武漢話是北方方言之一，所以與普通話差別不大。用文字表示時，有時表面上完全一致。當然武漢話有其獨特的使用方法，但這些詞匯外地人很難了解，必須用文字來解釋。當她寫《冷也好熱也好活着就好》的時候，發現了方言文字表示方法的問題。

本文儘就池莉成功地使用武漢話來表現武漢市民文化地特點及之後放棄使用武漢話的原因作以論述。

* 中國當代小説武漢話使用情況之考察—以池莉為主—(Keiko SEBE)

** 言語文化研究科博士後期課程

0 はじめに

中華人民共和国では改革開放政策を実行して以来、各地域の経済格差は広がる一方である。そして、経済的自信に裏付けされた地方の復権が著しく、地方独自の意識も高まりつつある。自己の利益を守るため、自と他の境界をきちんと引く、そうすることによって地域意識を高めてきた。これと同時に、経済的に立ち後れた地域などもかえって線引きをされることによって地域意識の自覚が促され、そういった2次発生的な地域主義が発達してきた。

これを受けて、文藝の上にも地域主義を反映したものが現れた。地方文化の濫立と言っても過言ではない。小説の中でも、従来からあった「京」味¹⁾などに加えて各地域を具象化したものが次々と現れた。その内の1つが「漢」味と呼称される武漢を舞台にした小説群である。

これら地域主義を反映した小説の中には地域言語を使用したものがある。近代にも老舎『駱駝祥子』(1936) や周立波『暴風驟雨』(1949) などの地域言語を使用した小説があった。しかしながら、現代においては地方の独立を嫌う政策が影響して、わずかに「京」味などを除いてまとまったものが出にくかった。ここ20年の政策の変化がこういった傾向を一変してしまったのである。この近年の傾向に従うように、武漢の小説の中でも武漢弁の使用が見られるようになった。しかし、その武漢弁使用は一時的なものが多く、恒常的なものではなかった。

ここでは、池莉の小説を中心にして、その武漢弁使用を見てゆく。それとともに、武漢弁使用がどうして恒常性を持たなかったのかを考察してゆきたい。

1 武漢弁使用状況

武漢市は1949年に漢口・漢陽・武昌の3つの街が合併されてできた。元々はそれぞれ特色を有した異なった言語を使用していたが、19世紀後半の調査では武漢三鎮の内部格差は小さくなっていった。1930年代に趙元任らが行った調査によると、

¹⁾「京」味とは、「北京の味」という意味で、北京の情緒に溢れた文学を「京味(兒)文学」と呼称している。また、老舎に代表される「京味(兒)」を踏襲して、北京語を使用し、北京の市民生活を描いた作品群を「京派小説」とも言う。

他に、上海の情緒を取り込んだ「海」味、武漢の市民生活を描いた「漢」味がある。

わずかな違いをのこすのみであった²⁾。現在、武漢市では60%あまりの人が漢口方言を話しているということであるが、ここでは大きく武漢弁ととらえ、細分はしない。

武漢弁は北方方言の西南次方言に属している。武漢が水陸の交通の要衝であるという地理的要因によって、政治、経済、文化などの交流の場として特殊な地位を築き上げてきた。特に湖北周辺の人たちは武漢の影響下にあり、言語においても互いに影響し合っていた。そのため、武漢弁を使用してはいなくとも、武漢弁を容易に理解することができた。その特性を生かして、武漢弁は湖北にあっては共通語としての役割を果たしてきた。

武漢弁の共通語としての機能は湖北の言語の多様性を示している。例えば、武昌県、黄陂、新洲3県の言語は江淮方言に属し、漢陽県の言語は西南官話に属している。このように、都市部と郊外では使用している言語が異なっている。この差異によって、武漢弁の都市方言としての強烈な意識が作り上げられている³⁾。

2 小説の中の武漢弁

現代小説、特に新時期⁴⁾以降の小説の中で、武漢弁使用を認められるのは、池莉と方方である。湖北の作家でも劉醒龍は湖北の小都市や農村を中心に描いているので、武漢弁を使用していない。全体的に言って、作品数も限られている。

池莉、方方ともに基本的に会話文に武漢弁を使用している。

例えば、

嫂子 擡起小男孩，說：“你這個婊子養的麼樣搞的吵！”

猫子說：“個巴媽苕貨，他是婊子養的你麼事？”

(池莉「冷也好熱也好活着就好」、『太陽出世』p.176)

²⁾ 朱建頌「武漢方言研究」武漢出版社、1992。「第參章 武漢方言的内部差異」に詳しい。

³⁾ 池莉「武漢話題」(池莉文集4『真實的日子』江蘇文藝出版社、1995)第9節に武漢人の都市意識と他地域出身者への蔑視について述べている。また、第6節に自他の区別的手段としての武漢弁の存在についても言及している。このため、武漢弁は都市方言の機能以外に、武漢人の都市意識形成の1手段としての機能も果たしていることが分かる。

⁴⁾ 中華人民共和國(新中国)成立(1949)以降の文学を「当代文学」と呼称するが、とりわけ文革が終息し一段落した78,9年以降の文学を「新時期文学」と称する。社会の変化と共に文学においても新時代が訪れ、作品、作風すべての面において、多角的になった。78年以降の10年間を「新時期」、それ以降を「後新時期」と呼ぶこともあるが、ここでは78年以降を新時期とした。

祖母火了。祖母説：“你幹麼事打她？她未必説的不是真話？婊子養的淑蘭，你是我兒媳婦，你有麼事資格來給老娘左一條右一條地提要求？以前是放狗屁，現在搞邪了，成了屁放狗了！”（方方「落日」、『一唱三嘆』p.285）

以上の下線部が典型的な武漢弁であるが、このように会話文を中心にした使用が主である。武漢弁は口語でしか表れないので、自然と会話部分の使用が多くなるのであろう。「婊子養的 [Biaoziyangdi]」は、他地域では本来の「売女の子」という意味が強く罵詈雑言としての側面が強い。しかし、武漢では常用語で意味も本来のものではない。腹を立てたときや「そんな上等な人間じゃあるまいて」という意味あいを含んだからかいの言葉として用い、強い意味は込められていない。「麼」は方方「落日」（『鍾山』1990年第6期）に「麼：漢口方言——怎麼，什麼之意。」(p.146)と注が付されているように、普通話の「什麼 [なに]」にあたる言葉である。注では「漢口方言」と明言されているが、武漢のどこでも用いられている。また「麼事」という形で最もよく用いられ、「要麼事 [要什麼]」のように使われる。「苕」は普通話の「傻 [ばか]」と同じで、表記は異なるが、音は比較的近い。また、語尾として「吵 [sa]」を多用するのも武漢弁の特色である。

ここに挙げたように、武漢弁は普通話に比べて罵詈雑言の使用頻度が高く、また好んで使用される⁵⁾。概して、本来の罵詈雑言の機能は失われている。特に「婊子養的」は親しい間柄であれば、ほとんど意味を持たずに人称名詞の前後に付けられるほど多用される。そのため、一般的に武漢弁は汚い言葉である、と考えられている⁶⁾。

池莉の場合、作品全編において会話部が武漢弁で書かれているのは、「冷也好熱也好活着就好」（『小説林』1991年第1、2期合刊。以下「冷也好」と表記）のみである。「冷也好」は小説の大部分が台詞の掛け合いでテンポよく進んでゆく。武漢人と漢口周辺の様子を巧くその言葉の掛け合いによって引き出している。特に主人公の猫子と燕華の近所のおぼさんとの掛け合いは、字面の上では「婊子養的」などの罵詈雑言を多用しつつも、愛情がこめられたやりとりとなっており、誤解され

⁵⁾ 論者の修士論文「新写実小説における武漢の都市文化と言葉」(1996)の添付資料「5.池莉へのインタビュー」参照。

⁶⁾ 池莉「武漢話題」(注3参照)の第1節に言葉も含めて、全中国において武漢は「汚い」、「文化的ではない」と認識されていることに言及をしている。また、同散文第6節にて「武漢話一説就像吵架，不好聽」(p.172)とも述べている。

がちな武漢弁の本質を巧く引き出している。

同時に、言葉の掛け合いを描いてゆくことで、「武漢の言葉は汚い」という固定概念をときほぐすことに成功している。池莉本人の言う処によれば、1993年3月の時点⁷⁾で、池莉の作品で最も人気がある作品ということであった。それも作品自体の持つテンポの良い魅力と、地方言語による言葉の掛け合いで進んでゆく場面が非常に精巧であったからではないだろうか。

池莉はその他の作品では、アクセントとして武漢弁を使用しているのみである。特に「冷也好」以降の作品は武漢へのこだわりを見せても、武漢弁へのこだわりは見せていない。しかしながら、それ以前の武漢弁の使用はある程度効果を狙った使用と考えてよい。武漢弁の使用不使用によって、人物像を書き分けているのである。例えば、「不談愛情」(『上海文学』1989年1月)の莊建非の口には罵詈も武漢弁も上らないのに対して、「太陽出世」(『鍾山』1990年第4期)の趙勝天は自分の花嫁に向かって「小婊子養的!」と叫んでいる。インテリで実家が武漢大学校内にあり、優秀な外科医の莊建非は花樓街出身の吉玲にとって絶好の玉の輿である。そういった人物は市井の言葉では描かれていない。反対に、俗物の趙勝天は喧嘩っ早く、責任感が欠けている。このように2人の性格や階級の違いを如実に表す1つの手段としている。

同じように、俗物中の俗物である趙勝天の母親をも武漢弁を使って巧く表現している。

「怒っちゃだめよ。あの人はああいう人なんだから。武漢弁で「筍箕圈、六點鐘——半轉；藕灌進了稀泥巴——糊了心眼」って言うでしょう。気にしちゃだめよ。…(以下、略)」
(『太陽出世』、『太陽出世』p.78)

「筍箕圈、六點鐘——半轉」は「もとは圓で全部あったのに半分欠けている」つまり「頭が足りない」ということで、「藕灌進了稀泥巴——糊了心眼」は「蓮根の穴に泥を詰めたよう」つまり「にぶい」ということを指している。これは武漢の歇後語(しゃれ言葉)で、ただ単に人物を貶しているだけでなく、「筍箕[米とぎ用のざる]」や「藕[蓮根]」、「稀泥巴[どろどろの泥]」といった農村に絡んだ語を使っている様に泥臭く、都会にあってスマートではないという趙勝天の母

⁷⁾1993年3月4日、池莉の当時花橋小区にあった自宅にて第1回目のインタビューを行った。なお、インタビューの内容については、注5参照。

親の姿をも表現している。「不談愛情」で吉玲の父親が見せた都会人の田舎蔑視がここにも現れており、それを2つの言葉に集約して表現している。

さらに、「煩惱人生」での印家厚の微妙な地位も僅かな武漢弁で表している。印家厚は一介の労働者で、住宅や奨励金のことに頭を悩ます普通の人である。ところが、日本人の技術研修を受け、会社が手放したくないと考える技術を持った人物でもある。そんな彼に子どもの悪戯がもとで、「胚子貨! [できそこない]」という武漢弁の罵語が浴びせられる。そこで、息子の雷雷に尋ねられる。

…「胚子貨って悪口なの? パパ」

「そうだよ。だからね、人に言っちゃいけないよ」

「胚子貨ってどんな意味なの?」

「人を罵るってことだよ」

「人の何を罵っているの?」

(「煩惱人生」、『太陽出世』p.156)

印家厚夫妻は雷雷に自分達のステイタスを上げてくれるような人物になることを期待をしている。だから、息子に「胚子貨」という身分、階級が高くはないことを象徴するような言葉は使わせたがらない。さらに、「胚子貨」には生活の醜悪な部分までもが込められており、印家厚が直視したくない現実の全てが含まれている。印家厚も北京に出て技術を学び、労働者としては上級に位置し、学もある。だから罵ることはあっても武漢弁で罵ることはない。しかしながら、彼は自分が一介の労働者に過ぎず、「胚子貨」に象徴される生活の中にいることを知っていた。「大人になれば分かるよ」と雷雷に諭しながらも、重くのしかかる現実と自らの微妙な立場をこの場面で暴露しているのである。

一方、方も武漢弁を多用しているのは「落日」のみで、他の作品では語彙レベルで作中に見られるものが多い。池莉と違って、使用の必然性が感じられない点から、語彙として「混入」してしまったものと考えてよいであろう。なお、この「混入」に関しては、他の地域の作家にも見られるもので、各地方の普通話に地方言語が混じり込んでしまっていることの反映である。

ここで、武漢弁の使用とその役割について見ると、大衆により近い位置に武漢弁が置かれているのが分かる。「小市民」とでも言うべき、都市の民衆を描くときに、武漢弁が使用されている。特に、庶民の中でも比較的下層階級の象徴として描かれている。また、使用することでリアルに彼らの姿が浮かび上がってくる。

「武漢弁」は一握りのインテリや階級のある人たちのものではなく、街で暮らす一般大衆の言語なのである。池莉はそれを利用して、人物像を巧く書き分けている。だからこそ、印家厚のような中間層がより高い地位に憧れつつも、現実の前では無力であるという揺れが浮き彫りにされる。しかし、武漢弁を支える民衆は力強く、楽観的である。武漢弁が「泥臭い」と言われても、生活に密着し人の息づかいが感じられる言語として、ある種の誇りを持って使用している。他地域から「田舎者」と感ずる言葉であっても、使用者たちにとってはそんな意識がないことを証明している。池莉はその泥臭い一面すら利用し、巧みに表現に取り入れているのである。

3 武漢弁使用の限界

口語の文章化が進む中、武漢弁も小説に取り上げられていっている。池莉も方も武漢弁を使用している。それにもかかわらず、その後武漢弁を取り立てて使用しないのはどうしてなのだろうか。それは作者自身が興味を無くしたというよりは、何か不都合なり限界を感じたからではないだろうか。特に、池莉は武漢を舞台とした小説に巧く武漢弁を取り込んでいたにも関わらず、使用しなくなった。もちろん、同じ表現方法をいつまでも使うことをよしとはしないとはいえ、武漢自体への拘りに比しても武漢弁は早くに放棄されている。

「冷也好」は武漢の都市としての復権とともに、内外から武漢を認知してもらうために、武漢紹介の意図が込められた小説であった。会話部が全て武漢弁であるだけでなく、武漢の「小吃」紹介に夏の風物詩まで盛り込まれている。

漢珍は猫子の同僚で、レジを担当している。店の奥で扇風機を独占し、いつも猫子と言葉の応酬をし合う。体温計を買いに来た客と猫子が「這個妹子養的！」と言って笑っているので、どうしたのか尋ねる漢珍を猫子は無視して答えない。漢珍は当ててみると言われ、しばらく言い合いをした後、「個巴媽一點都不男子漢」と言い返す。それをやり返しつつも、猫子が体温計があまりの暑さで日に当たったとたん、ポンという音を立てて破裂したことを伝える。以下は、最初は信じなかった漢珍がやっと納得したときの一場面である。

漢珍は言った。「世の中には変なことがあるものね [世界真奇妙]」

猫子は漢珍をちらっと白い目で見て、テレビ番組「正大綜藝」の司会者・姜

昆の普通話をまねていった。「世の中には不思議なことがあるんだね [世界真奇妙]」

武漢式の普通話には人をからかうニュアンスがある。

2人は腹をかかえて笑った。(「冷也好」、『太陽出世』p.167)

[]内は原文である。原文では漢珍も猫子も字面では同じことを言っている。この場面は、武漢人の普通話に対する意識を表している。つまり、普通話は非日常言語であり、さらに気取った感がある。だからこそ、漢珍の使った「世界真奇妙」という日常に使用しない、少し気取った身分不相応な言葉に、普通話を使っただけからかっているのである。しかし、ここで池莉の苦勞が窺える。「世界真奇妙」という日常的ではない言葉になると、表記の上では普通話と違いが無くなってしまふのである。語彙や発音が異なるといっても、同じ言語である。ましてや呉語や粵語と違って、普通話の基になった北方方言の1つである以上、その差異は大きくはない。文語の上では特殊な語彙を除いては、武漢弁も普通話もない。この場面では、漢珍が武漢弁で、猫子が普通話で言ったことを対照的に表さねばならない。そこで、テレビ番組の司会者を持ってくることで、猫子が普通話で「世界真奇妙」と言ったことを強調することになった。

その上に、武漢人の普通話を使用するときの役割をさらに説明している。武漢や湖北の人は別であろうが、他地域の人が「冷也好」を読んでも武漢弁で読んでくれるわけではない。特徴的な「糜事」や「姑娘伢 [=女孩子、女の子]」といった語があるときはまだしも、全編武漢弁という前提があっても、受け手側は自己の言語で読んでいる可能性が高い。そうすると、武漢弁と普通話の2つの言語の妙というものが半減してしまう。2つの言語の差異から出る妙を汲んでもらおうとすれば、いちいち説明を加えなくてはならないのである。これでは、折角武漢弁を使用しても説明という本題に関係のない手間を要するだけである。

同時に、語彙のレベルにも同じ問題点が浮かび上がってくる。それは、武漢独特の言い回しであればあるほど、他地域の人には理解しにくくなるという点である。例えば、前述した歇後語でも、後半部に謎解きが書かれていなければ、100%の理解は引き出しにくい。事実、方方の「落日」には「太：漢口方言——奶奶」(p.146) や「板眼：方言即“本事”」(p.152) といった具合に注釈が付されている⁸⁾。注釈の必要性があるということは、誰にでも容易に理解ができる範囲の

⁸⁾ 同じように方言への注が付いている池莉「預謀殺人」(中国社会科学出版社、1993)では「冷也好」に注釈がない。これは池莉が理解できると判断したためか、あるいは作品の雰囲気壊したくなかったからではないだろうか。単なる池莉と方方の認識のずれということも否定できない。

差異ではないということだ。

つまり、文章化した武漢弁は普通話とほとんど変わらないこともあれば、語彙の違いの全てが一目見て意味の分かる範囲ではないこともある。非常に微妙でどっちつかずの特徴と言える。

武漢を理解してもらうにあたって、なるべく理解の妨げになるような表現を避けたい池莉にしてみれば、武漢弁を使用し続けることがかえって障害になりかねなかったのではないだろうか。普通話との折り返しにも、武漢弁を使い続けるにも、説明を要するのでは何とも具合が悪い。逆に「冷也好」が武漢紹介に費やされているように、武漢弁紹介としての働きも「冷也好」にはあった。池莉は「武漢話題」⁹⁾という散文で、以下の様に言っている。

… 武漢人の言うところの「婊子養的」は実は罵語や汚い言葉にはあたらない。ある君子はこう尋ねるだろう。「罵ってないと言うのなら、何だというのだね」。この質問は簡単だ。それは語気助詞で、感嘆の一種である。実際、武漢だけではなく、その他の都市や外国に及んでも、人々が非常に深刻で衝動的な瞬間に至れば、往々にして荒っぽい言葉でしかその心情を表せないことがある。あるところでは「他媽的」と言い、またあるところでは「狗日的」と言うのと同じことだ。こういった用語は絶対字面の意味から理解してはならない。浅く表面からしか理解しなければ、誰だって我々（中国）人民を誤解してしまうだろう。

〔（ ）内、訳者が補ったもの〕 （「武漢話題」、『真実的日子』p.164）

この散文の中でも、武漢に対する誤解について訴えているように、武漢弁に対する正しい認識のためにあえて武漢弁を全編使用することになったのであろう。そして「冷也好」は充分にその役割を果たしている。池莉は従来武漢弁の有効性を知り尽くして、作中に利用してきた。それすらも放棄することになったのは、「冷也好」に何らかの契機があったのであろう。

1つには、表記上の問題が考えられる。既に挙げた「世界真奇妙」にしても、本来は普通話とは違う。口語であるが故に、特異な表記法を持たないだけである。例えば、「麼事」を取ってみても、これを普通話で読むと「meshi」となるが、武漢弁では「mosʅ」となる。ここでは、声調符号はあえて表記しないが、発音だけ見ても違いがある。つまり、普通話と目に見えない部分の差異が大きいのである。

⁹⁾原載不明。池莉文集4『真実的日子』江蘇文藝出版社、1995

これは、文章では表すことが出来ない。だからこそ、前述したような普通話ではないんだという説明が必要になってくるのだ。

同じように、漢字表記できないものがある。例えば、魯迅は「故郷」(1921)の中で、「獠」という字を創り出して使用したと述べている。このように、表記するための言語ではないので、漢字表記自体が存在しないことがあるのである。例えば、「鞞鞋 [布靴の甲の部分の布を張る]」は「□鞋面 (子)」と言う¹⁰⁾。□部は表記のできないもので、小説で使用するには伏せ字にするか、発音表記しか手だてがない。伏せ字にして効果をはかれるものはよいが、意味もなく伏せ字を使っても仕方がない。また例のように、1文字抜ける程度ならまだしも、全く単語全体が文字化できないこともある。そうなってしまうと、全くのお手上げ状態である。現在の漢字表記が地方言語の表記に必ずしも有効ではないのである。

このように武漢弁を使い続ければ、表記の問題に必ず直面する。「冷也好」で徹頭徹尾使用したことで、武漢弁の表記上の限界に少なからず気づいてしまったのではなかろうか。反対に武漢弁があくまで口語であって、表記に適していないことを知っていたからこそ、「冷也好」1作のみが全編に武漢弁を使用されることになったというのが、正しいかもしれない。その上、「冷也好」の目的の1つである武漢弁紹介はこの1作で十分果たされている。このことから、「冷也好」以降の作品で武漢弁の使用をみないのである。もちろん、地方言語の表記の難しさという一面も見逃すことはできない。やはりこのことが直接的に小説の中での武漢弁使用の非恒常性に繋がっていると、考えられる。池莉のみならず、方方も近作における武漢弁使用が認められないのは、やはり池莉だけの問題ではなく、地方言語を取り込もうとする作家全てに共通する問題点と難しさがあるのではないだろうか。

4 おわりに

池莉は武漢弁を使用することで、武漢の文化が市井文化であるという本質を表現した。それと同時に、その特性を生かし武漢弁を使用することで、武漢市民を描き出した。特に「冷也好」では全編に渡って武漢弁を使用し、武漢弁への正しい認識を引き出すとともに、テンポよく掛け合わされる武漢弁の会話を中心にス

¹⁰⁾ 「第玖章 分類詞表」(『武漢方言研究』) 参照。

トリーを展開することで、武漢の都市生活者を見事に浮き彫りにした。その手法は小気味のよいものであった。しかし、「冷也好」で武漢弁の役目は終わってしまった。

「冷也好」において、誤解されがちな武漢弁がどのようなものか紹介する、という使命は果たされた。そして、表記の上で限界を感じた、あるいは武漢弁の受ける制限を熟知していたからこそ、「冷也好」を最後に武漢弁使用を止めてしまったのであろう。表現の制限はいろいろな形で存在していた。そもそも武漢弁は、呉語や粵語と異なり、独立した形態を持った言語として認められていない。そのため独自性を主張しようにも、武漢弁が北方方言の範疇に入ることから、普通話と表記の上でぶつかってしまい、かえってその独自性が発露されにくい。また、普通話との組み合わせが不自由である。さらに、語彙レベルにおいて理解しにくい言葉があり、それにいちいち注をふることで、小説の面白味が半減してしまう。その上、口語である武漢弁の文章化に表記の上での限界がある。武漢弁を使用することで、作品に規制を受けてしまうようでは、武漢弁に拘るメリットが少ない。そこで、池莉は武漢弁を放棄してしまった、と考えられるのである。それは池莉に限って見れば、予定された放棄であったと言ってもよい。しかし、1年の誤差はあるものの、方も武漢弁をしなくなったことから鑑みれば、武漢弁を使い続けることに不便があったと考えられ、これら表記上の問題も見過ごすことは出来ない。

小説の中の武漢弁使用における問題は、武漢弁だけに限った問題ではない。各地方言語に存在する問題である。完全に地方方言を使用した小説が現れるには、地方言語の表記法の整備が待たれる。もちろん、それまで地方言語が使用されることがないということはあるにない。今後、ますます地域主義が進むにつれ陸続と現れるであろう。中には何らかの解決法を見いだしたものが、あるかもしれない。

しかしながら、武漢弁においては漢字に発音表記でもしなければ、音による表現はできない。音に合わせれば、字を見れば意味が分かるという漢字の特性が失われてしまう。そのどちらをも持ち合わせた表記が必要である。例えば、一部の新語に見られるローマ字と漢字の共存した形、「BP機 [ポケベル]」や「卡拉OK [カラオケ]」といった可変性の利く表記が考えられる。これらは、まだしばらくの時間と議論を要する。

池莉が武漢弁の本質を巧くつきながらも、放棄の道を選んだ。これは、漢語の

持つ地方言語への対応性が充分ではないという弱点の露呈でもある。これからの漢語の発展いかんによっては、新たな武漢弁使用の模索もありえるが、現状では地方言語を取り込むことで受ける制約の方が、使用するメリットよりも大きい。それ故、武漢弁使用が恒常性を持てなかったのであろう。

主要参考文献

「20世紀文学—多国籍性の魅力」『新潮』1991年5月号

池莉『太陽出世』長江文藝出版社、1992年

池莉『預謀殺人』中国社会科学出版社、1993年

樊星「當代文學與地域文化」(『文學評論』1996年4月)

方方『一唱三嘆』陝西人民出版社、1992年

橋本草子「池莉「煩惱人生」について」『野草』第52号、1993年

魯迅、竹内好訳『阿Q正伝・狂人日記 他12篇(呐喊)』岩波文庫、1981年

富田聰「中国の“トヨタ苛め”は止まらない」『文藝春秋』1996年10月号

朱建頌『武漢方言研究』武漢出版社、1992年